

座談会

ミドル世代らしいフロンティア開拓力

トランジションに生きる ミドル世代



「モラトリアム世代」「新人類」と呼ばれ、存在感の薄い世代。
この世代がミドルとなり、トランジションを迎えた。
当事者である現ミドル世代が、生活実感から自己評価し、
明日を拓く可能性を確認した。

「明日館」は、日本の教育の明日を託して命名されました。自由学園創設の理念を活かすべく、F・L・ライトに設計を委嘱して大正10年に池袋駅南西の閑静な住宅地に完成した、典型的なライト建築の一つです。平成9年には国の重要文化財に指定され、保存工事を加え再び学びの場として広く活用され始めています。

2002年12月6日 目白・自由学園「明日館」にて

変わり目を生きてきたという 同世代感覚

中間 今回テーマの対象としている30代後半および40代は、ある意味で人生のブライムタイムであり、ボトムとも見ることが出来ます。とにかく、人生の転換期（トランジション）であるのは確かなようです。そして今、自分の転機が社会の転機と重なった世代でもあります。今日は、この世代の特徴を、当事者でもある皆さんの生活実感を通してうかがい、近未来への可能性を

見つけたいと思っています。そのためこの「明日館」を会場に選びました。

さて、阿部さんは、ミドルを主たる読者層とする雑誌「プレジデント」の編集をされています。いろいろとミドルの意識に関するデータ集積もあると思いますが、興味深い結果などありませんか。

阿部 「仕事に求めるものが変わってきているのではないか」という問題意識から、昨年7月に実施した調査結果で、私たちが驚いた結果がありました。「仕事のために、家庭生活が犠牲になってもやむを得ないと思いますか」という質問に対して、50代、60代ですと約3割が「はい、そう思います」と

〈出席者〉

阿部 佳代子

「プレジデント」編集長代理

小林 洋

オムロン株式会社ヘルスケアビジネスカンパニー
マーケティング部長

佐藤 安紀

文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課
民間教育事業室長

竹内 浩美

主婦/PCママサロン竹内@三鷹上連雀教室・講師

山下 正幸

株式会社ウエルネス・フロンティア・センター
代表取締役

李 秀一

北京瑞輝雲皇文化発展有限責任公司
プロデューサー

〈司会・進行〉

中間 真一

HRI社会研究部 主任研究員

※所属・役職名は座談会実施当日のもの

回答しています。しかし、40代となった途端に、1割を切つて8.2%です。以降、30代が7.8%、20代が8.6%とほとんど変化はありません。つまり、ミドル世代と、その前の世代との間には、仕事、家庭、個人に関する価値観に、大きな断絶があつたのです。

中間 やはり、一線を画せる。この中で是最年長の小林さん、実感はありますか。

小林 高校に入学したときの3年生に、学生運動をしていた人がいました。学生運動は、それで終わりましたが、そこから自由が始まりました。まずは、制服が無くなった。というわけで、学生運動の後のイイトと取りで、ほとんど自主性に任されて過ごせた高校時代という思い出があります。しかし、3、4年後には再び制服に戻つたのです。それが、次の新人類だつたという感じでした。

中間 山下さんと佐藤さんは30代後半。新人類という括りが出始める頃です。

山下 私と同じ年齢なのが、ダウンタウンの松ちゃん、浜ちゃん。1つ下になると、ウッチャン、ナンチャンがいます。野球でいうと、工藤、槇原。実は、スポーツや芸能文化の世界で中核を担い、将来を期待されている、本人もそれなりの意見を持っているのがこの世代です。

私たちは、大学入試に共通一次試験が持ち込まれ、基準自体がコロコロ変わつて、

翻弄された世代です。大事な節目の受験で迷惑を被りました。また、杓子定規で自分が測られることに、すごく抵抗感がありました。そして、私が大学を卒業した当時は就職協定が厳しかった。節目節目で、社会が勝手にルールを決め、それにはめられてきたことへの強い抵抗感を覚えていました。

私の世代は昔の世代の最後の若だと思ふんです。子どもの頃、メダカやドジョウがいる田んぼで遊んでいた最後の世代。昔を知っている、しんがり世代です。そしてまた、現代を席卷しているデジタル世代の最初の世代でもあります。

また、私たちの世代を象徴するのは、やはりラジオです。「オールナイトニッポン」や「歌うヘッドライト」など、ラジオからメッセージを受けたと思います。私にとって、中島みゆきは「プロジェクトX」を歌うおぼさんじゃない。

阿部 そうそう。やっぱり「時代」ですよ。
中間 私もまったく同感です。そしてここでも、ラジオの終わり、テレビの始まりというポーター世代と言えますね。

ミドルとヤングの違いはどこにある？

佐藤 私は公務員として約20年間勤めて

きて、最近ようやく自分の力とそれに伴う責任というものがわかってきたように思います。若い頃は単に力さえ出せば良いと思つていた。この年代になって初めて、「本当に自分に何ができるのか」が見えてきた。そういう時がミドルなのかと感じます。

中間 客観的に自分を見ることができると時期ということですね。竹内さんは母親として、いろいろな年代の方と、ビジネスとは違う接触もあると思います。その中のミドルというポジションを、どのように感じていますか。

竹内 私がミドルだと自覚するようになったのは、40の舞台に乗ってからです。女性なので、3がつくうちは絶対若いと思つていました(笑)。やはり舞台に乗ると、一種の開き直りの感覚が出てきます。それまで、若さとか美しさとか、外見的なことにごだわつていたのが、もうちょっと違う尺度で自分の人生を見てみようとする。たとえば、旦那の収入の範囲内でやりくりするのが「ステキな奥さん」だと思つていたのが、「そうじゃない」と思つたり。子どもの手も離れてくるので、40代になって逆に自由になったところもあります。同世代の女性たちとも、「もう少し一人の個人として、これから先の人生を考えてみたい」というような、そういう話でまとまるものが多くなりました。

中間 李さんは、中国で生まれ育つて、現在は中国を拠点に、映画のプロデュースなど文化事業を興して活躍されています。そんな李さんのミドル観は、どんなものでしょう。

李 「いつ頃ミドルと感じたか」の答えは単純明快です。この座談会の依頼を受けたときです。「あ、自分はミドルと思われているんだ」と軽いショックを受けた(笑)。今まで、中年やミドルという言葉は、自分には無縁だと思つていたので。それで、今回初めて真剣に考えるようになった。少なくとも、周りからミドルと見られていることがわかつたから。

今の私の仕事に必要なのは、発想やセンス、美的意識です。これらの点では、若い人と比べて遜色ない自信があります。しかし、ここ最近で強く感じるのは体力です。一つの作品を作り終えて、次の作品に取りかかるまでの時間が長くなりました。身体が疲れるが抜けないのです。そういう苦しみが出てくるのがミドルです。発想がある限りは、それをカタチにしたいと思うのですが、体力はほとんど消耗していく。多分、今後よくなることはないわけです。クリエイティブな仕事だからこそ面白いのですが、この世界では若い連中も、どんどん会社を作つて出てきている。彼らと競争しなくてはならないから、体力の維持は大きな問題



阿部 佳代子(あべ かよこ)

1957年、神奈川県横浜市生まれ。早稲田大学教育学部卒業。プレジデント社入社。書籍編集部、広告部、マネージャー編集部、プレジデント編集部などを経て2000年1月より現職。かつての「日本式経営」に代わる日本人の長所を生かした新しい企業経営のあり方、個人のキャリア開発のモデルづくりが、目下の関心事。

●ミドルに至る私の一大事

「戦争に正しい戦争、間違った戦争の区別があるわけではない。結果として、ただ勝った戦争と負けた戦争があるだけだ」

折りに触れ、こう話してくださったのは、京都大学名誉教授の故・会田雄次先生でした。何か物事を理解しようとする際、たとえば時間軸という物差しを入れたらどう見えるか。あるいは「正義か不正義か」という議論に際し、「ちよつと待てよ、これは誰にとつての正義で……」と、一歩引いて考える。すなわち、物事をできるだけ複眼的に見ようとすることの大切さを教えていただいたと感じています。

一億総懺悔時代から「ジャパン・アズ・ナンバーワン」時代を経て、今また極度の自信喪失に陥っている現在を見ると、どうしてこうも日本人は一方に振れやすいのかとの思いを強くします。そういった論調のむなしさをリアルタイムで体験できた世代の私たちが、いよいよ社会のミドルになったとの自覚から、小さな一歩を踏み出せばと思います。

です。

もう一つは、これからの限られた時間の中で、どんな作品を作っていくかを強く意識するようになった。寿命を考えると、もはや多くの作品は作れない。そうすると、一つひとつの作品を大切にしていこうという思いが強くなりました。

竹内 確かに若いときはあれもこれもできるかもしれないけれど、これからはテーマを絞らないと「私の人生、結局何もせず終わってしまう」と感じます。そういうところに気づくのがミドルかも知れません。阿部 私がここ2、3年で強く感じるのは、クラス会や同窓会をやりたいがる人が急に多くなったこと。今年は高校時代の同年会やクラス会、クラス会は40を過ぎてから毎年やっています。去年は大学時代のクラス会が15年ぶりにありました。自分たちが若いときに経験してきたことや感動したことを、もう一度確認する場が欲しくな

てきているような気がします。とくに男性

の場合、中間管理職になったりして、結構キツイところにさしかかっている人が多い。

経済的にも時間的にも余裕がない分、かつての日常、今の非日常としてのクラス会でホツとしたり、「自分は何か好きな人だったんだろう」と、アイデンティティーを確認しようとしているのかもしれない。

中間 ボーダー世代として、終わりと始まりの渦中で育ってきた私たちが、今ちょうど自らの人生の上でも、加算型で進んできて、減算型に移ろうとするポジションにきている。そして、同時に社会も転機にきている。このあたり、今のミドルを考える上で重要なポイントではないかと感じます。

ミドル世代だから拓ける
フロンティアがある

中間 さて、それでは私たちがミドル世代

は、次の社会を拓いていける世代なのか

という話をしたいと思います。山下さんが興じた会社名でもある「フロンティア」を、ミドル世代が担えるかという問題です。

最近企業の社長交代が相次ぐ中で、任天堂やローソン、ユニクロといった新しい産業構造をリードする企業の新社長に、40歳前後の方が就任しています。政治の世界でも、ノーベル賞の田中さんのように学問の世界でも同様です。控え目ながら、ニューリーダー的ポジションに、この世代が出てきています。私は、先ほどから話題となっている「しんがり」×「フロンティア」＝「ミドル世代」の特性が、社会適応力の高さと重なって現れた結果ではないかと思うのです。従来、最も「守り」「保つ」サイドにあつた行政の世界でもそうした変化が起こっていると聞きますが、いかがでしょう。

佐藤 ミドル世代の人たちは、社会の現状を見ながら、このまま行政や他人に任せ

ミドル世代のライフヒストリー

●1955年(昭和30年)

三種の神器(白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫)がブームに

●1956年(昭和31年)

後楽園遊園地オープン
日本住宅公団が2DK住宅を販売、「団地族」が流行語に

●1957年(昭和32年)

経済企画庁の「年次経済報告(現経済白書)」に「もはや戦後ではない」の言葉が登場

●1958年(昭和33年)

有楽町にそごうデパートが開店
初めての1万円札が発行される
東京タワー完成

●1959年(昭和34年)

皇太子(現天皇陛下)ご成婚
初の国産カラーテレビ登場
初の少年向け週刊誌「少年マガジン」と「少年サンデー」が創刊

●1960年(昭和35年)

60年安保闘争。東大生の権美智子さん死亡
3C(カラーテレビ、マイカー、クーラー)があこがれの品に
ダッコちゃんブーム

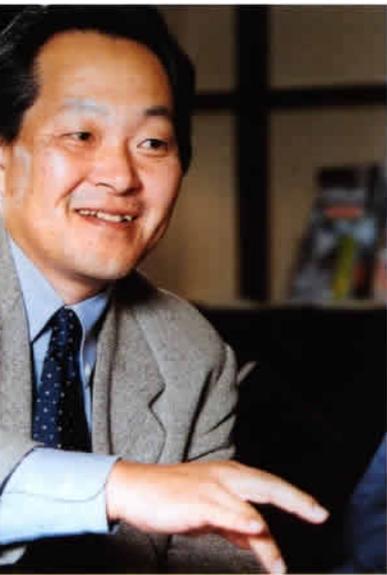
●1961年(昭和36年)

ソ連で世界初の有人衛星打ち上げに成功
「巨人」大鵬(卵焼き)が流行語に
貿易自由化でコカ・コーラが出回る

●1962年(昭和37年)

東京都が世界初の1000万都市に





小林 洋(こばやし ゆたか)

1956年京都生まれ。79年京都工芸繊維大学工芸学部意匠工芸学科卒。81年に立石電機株式会社(現オムロン株式会社)に入社し、プロダクトデザインマネジメントを担当する。91年よりオムロンミラノデザインセンターに所長として駐在。98年よりヘルスケアビジネスカンパニーへ移り、2002年より現職。

●ミドルに至る私の一大事

大学でインダストリアルデザインを専攻して会社に入り、健康機器や情報関連機器のデザインマネジメントを担当していましたが、その時代(最初の10年)の自律的行動と、30代半ばに4年弱を過ごしたイタリアでの駐在(次の10年に大きく影響)が現在の私の価値基準を大きく左右しています。

自律的に活動するためには専門性が必要で、それが私にとってはインダストリアルデザインであったわけですが、クリエイティブをという姿勢をいつもキープし、開発するための要領をそのときに形成していったと思います。さらに、自分の快適な生活の原点にあるイタリアでの本能的な生活経験が、ミドルになった自分の生活の価値観になっているとも思われます。

この2つを融合して創造的な仕事を行い、質の高い生活をエンジョイするその次の10年に期待しています。

きりではないけど、大声では言いませんが、強く感じています。だからこそ、「自分たちがこれからの新しい社会をつくらせてほしい」とか「こうじゃないか」と考える人たちが出てきた。それが、フロンティアと言われるような、新しいリーダーたちなのだろうと思います。

新しい社会をつくるには、なにも政治家になるとか起業家になるとか、そういうことだけじゃない。社会に役立つ、地に根ざした活動をしている人たちが増えており、行政も注目し始めています。

のです。そこにもミドルの方々の活躍が目立ち始めています。
中間 それは、行政の既得権を手放していくことにもつながりますね。
佐藤 その通りです。私たちの先輩の時代には、さまざまな権限や権益に守られてきました。しかし、これからの時代はそうはいかない。今まで築き上げられてきた権限や権益を壊すことがこれからの潮流です。それが規制緩和や行政改革です。妙なことに思われるかもしれませんが、今まで握っていたものを国民の方々へ返していくことが、僕らの働きがいや生きがいにつながっていくのだと思っています。

組織の中のフロンティア 起業というフロンティア

中間 行政の世界でも、柔らかな創造的破壊者としてのミドルが現れ始めたので

すね。それでは、大企業の中ではどうでしょう。今の組織の中のミドルは、かなり厳しい立場にある。我慢の人が多い。しかし、小林さんは「ウォーキングスタイル」という歩数計のコミュニティサイトを立ち上げるなど、ビジネスの面でも積極的にフロンティアを拓いている。
小林 私にとっては、ミドルは我慢ではなく、動きやすい年代という実感です。
中間 20年間働いて得た人脈などの資産を自由に活用できるのがミドルだというわけですね。
小林 それはあります。何か一つの仕事をするとときに、ただその一つのことしか取りに行かないと、それ以上は無駄。多分、周辺にまだいっぱい宝が転がっているはずなのです。それを拾おうとするか否かで決まります。
われわれの世代が、何を求められているかということ、ドカッと座っていることではな

●1963年(昭和38年)
共働きが増え、「カギ子」という言葉が流行
「鉄腕アトム」のテレビ放送開始



●1964年(昭和39年)
東海道新幹線開業
東京オリンピック開催

●1965年(昭和40年)
NHK「ひょうりょうたん島」放映開始
アメリカがベトナム戦争に本格介入

●1966年(昭和41年)
「おはけのQ太郎」「スーパージャッター」などがテレビアニメ化
ビートルズ来日
中国で文化大革命が本格化

●1967年(昭和42年)
テレビで「ウルトラマン」の放映開始
グループサウンズ大流行

●1968年(昭和43年)
リカちゃん人形が発売され、大人気に
ピンキーとキラーズ「恋の季節」ヒット

●1969年(昭和44年)
永井豪「バレンチ学園」連載開始
テレビアニメ「巨人の星」スタート

●1969年(昭和44年)
東大安田講堂陥落、学生運動は下火に
アメリカのアポロ
日号が月面着陸
に成功

「サインはV」柔
道「直線」などテ
レビでスポ根もの
がヒット





佐藤 安紀(さとう やすのり)

1989年、文部省に入り、生涯学習、初等中等教育、情報教育、著作権の各行政に携わる。98年、スポーツ振興投票制度(愛称toto)を立ち上げ、スポーツによる地域振興に携わる。2000年からは、生涯学習政策局民間教育事業室長として、教育改革の広報、地域の教育力の創造、企業の教育分野の社会貢献活動との連携を担当。

●ミドルに至る私の一大事

日本社会はバブル景気も終焉の頃、東京霞ヶ関の中央官庁も権限の拡大に必死になっていた。追い風に乗ることだけがすべてのごとく、役所間の不毛な縄張り争いは体力・気力消耗戦の様相を呈していた。そのうち、私は本当の自分がどんどん失われていくような気がしてならなかった。ふとある日、新聞に大空を飛んでいる人たちが取り上げられていた。パラグライダーである。「これだ。自分が探求していたものは」。

早速、クラブの門を叩いた。知り合ったばかりの仲間たちに迷惑をかけながら、汗と泥だらけになって陸地の練習をした。海を見下ろす高台から初めてのテイクオフ。向かい風に逆らって力を振り絞り前進する。すると爽やかな上昇風を浴びて空中へ舞い上がる。とても気持ちよい。手元の無線機からコーチの声が聞こえた。「佐藤君、翼はアゲンストが吹いていないと飛べないんだよ。それから、後でみんなにお礼を言っておきな」。

初めて大空を飛んだ感動の中、自分自身を見つめ直す言葉であった。追い風に流されるのではなく逆風の中で仕事をしてこそ、みんなの力を借りて一緒に仕事をしてこそ、自分の存在を感じることができるのだと気づいた。

い。動くことなんです。40代前半のマツダの社長も日産のゴーンさんも、社長室に技術者を呼びつけて仕事をしない。自分が現場に行く。フットワークが軽いんです。そういう年代が今の40代だと思います。体力や人脈判断力などを考えれば、40代こそ今の企業組織の閉塞感を打破できる世代に間違いないと思います。

中間 一方、組織の中ではなく、組織を立ち上げてフロンティアを拓いている山下さんは、どのように感じますか。

山下 正直に言うと、行政や大組織の企業はうらやましく感じます。起業すると、資金調達に追われる。無駄な時間はまったく許されない。新しい情報よりも、今いる状況を泳ぎ切らなければならぬ。そういうしないと、溺れ死んでしまう。

もちろん、長銀にいたときには、こんなことはまったく考えませんでした。企画が10本中1本当たれば大成功。しかし、今は

それでは即アウトです。ですから、会社を興してやり切ることは、世代の問題ではありません。

実は、長銀の同期の中で会社を立ち上げたのは結局私だけなのです。私は、ベンチャー育成を目的とした早稲田大学アジア太平洋研究科の1期生です。しかし、卒業してベンチャーを立ち上げたのは私を含めて3名程度というのが現実。一橋大学の卒業生を探しても、楽天の三木谷君のように突出した人はいますが、ベンチャーをやっているのはごくわずかです。

みんな「ベンチャーは大事だ」と言いますが、当事者にはなりません。少し冷めた言い方をすると、ミドルに限らず、みんなが言うほど、日本の世の中は変わっていない。組織の中のミドルは、20年の経験を生かして余裕を持てます。しかし、フロンティアというのは、基本的に経験のない中でもよくことです。休む間のない世界です。

中間 まさにフロンティアに立っている発言には圧倒されます。しかし、組織の中でミドルがフロンティアとして動き始めているのは確かなようです。我慢のミドルではなく、余裕のミドル、チャンスのミドルという見方が出てきました。

竹内さんは、軸足は主婦に置きながらも、生きがいとか働きたい、社会へのアクセスを求めて、もうけるよりも達成感、成長よりも充実感重視で、パソコンを使って身近なところから仕事を拓いたわけですね。専業主婦からのフロンティア開拓ということだと思えますが、心境の変化などはありますか。

気負いのないバランス感覚が新しい場をつくり出す

竹内 専業主婦のときには被害者意識がありました。旦那が早く帰って来てくれな

●1970年(昭和45年)

大阪で万国博覧会開幕

日航機「よび号」

乗っ取り事件発

生

テレビアニメ「あ

したのジョー」放

映開始

「アンアン」創刊

●1971年(昭和46年)

マクドナルド、銀座三越デパートに1号店

小柳ルミ子、南沙織、天地真理の「新三人娘」

が人気

「仮面ライダー」が

テレビに初登場

●1972年

(昭和47年)

浅間山荘事件発生

赤軍派リンチ事件

札幌で冬季オリンピック開催

吉田拓郎「結婚しようよ」、ガロ「学生街の喫茶店」がヒット

●1973年(昭和48年)

第一次石油シラク

TBS「8時だよ!全員集合」の最高視聴率が50%を超える

南こうせつとかぐや姫「神田川」大ヒット

森昌子、桜田淳子、山口百恵の「花の中三トリオ」デビュー

●1974年

(昭和49年)

長嶋茂雄が現役を引退、巨人軍の監督に

「セブン・イレブン」1号店オープン

マンガのヒットを受け、宝塚歌劇で「ベルばらブーム





竹内 浩美(たけうち ひろみ)

1961年生まれ。大学卒業後、OLを経て、大学時代の同級生と結婚。主婦業をこなしつつさまざまなパートに手を染め、その間に長男・次男を出産。パート時代の輸入会社社長の依頼でパソコンによる文書入力用の在宅ワークをきっかけに、自宅での地域密着型パソコン教室、インストラクター、PCサポートなどを始める。家庭・PC・自身のメンテナンスの毎日。

●ミドルに至る私の一大事

先日、思わぬ人に「竹内さんって根気ないよね」と言われ、図星を突かれて動揺しました。子どものときから「好奇心」は強いが、「持続力」がない。興味を持つと即実行。しかし興味がなくなるか新しいことが始まると、情熱ごと移ってしまふ。すべて中途半端なまま、お年頃もミドル。

家庭、内職、趣味も半端なりにこなしつつ、言い尽くせない焦燥感を感じていた30代後半。しかし転機がやってきました。パソコン・インターネット。密室に風穴が開きました。現在の仕事もこのパソコンを通して得たものです。新しい友だちや趣味の仲間も。

子育てや家事で「家庭」に縛られている主婦の生活を根本から変えることができるこの機械と環境は、使い手の意識と使い方でもまだまだ進化するでしょう。根気のない私にもまだに興味と情熱を失わずにいる。大切なのは実生活の中でのバランス感覚(主婦の感性とも言う)かな!? このパソコンを使ってミドルから齢を重ねていく女性の生き方を模索中です。

いから自分は忙しいとか、子育てをひとり任されて一日中家の中にいるから、ストレスがたまるんだという。しかし、今はすべて自分の責任です。たとえもうからなくても、社会とつながって、だけど子育てや主婦業もおろそかにしたくないと欲張ったところがあるので、誰のせいにもできないんです。失敗しても、家の中が汚くなっても自分の責任。そういう意識が生まれませんでした。すべて自分のためなので、働きがいがあります。それから、仕事を通じて自身を再確認できたのかなと感じています。

中間 阿部さんは、これまで多くの優れた経営者や有識者の方々を取材されていると思います。そして、2002年の特集の中には、「男40代『取締役』の研究」というテーマもありましたが、だんだん上の世代から同世代の取材へと移ってきていると思います。われわれミドル世代のリーダーシップの特徴とは何でしょう。

阿部 私たちの前の世代、団塊の世代の私たちは、時代を区切る大きな戦争の直後に生まれた人々です。戦前の価値観が全否定された直後の戦後民主主義に基づいた、新しい教育制度の申し子でもある。彼らは戦争に対する反省と、旧来の体制の徹底的な打破を訴えて運動してきた。ところが、就職すると日本経済は高度成長期。結局、すぐ下の私たち世代から見ると、若いときは異議申し立てしてみたいなことをしてきたにもかかわらず、社会に出たら、嫌っていたはずの前世代の価値観や物事の決め方、そういうものを見事に踏襲した世代じゃないかという印象があるんです。私たちの世代は、そういう先輩に対してずっと違和感を抱いていた。最初から自分たちは彼らとは違うのだと。だけど、社会の流れに抗うこともせず、新たな価値を自力で開拓しようとの努力もしてこなかった。とりあえずの適応をしてきた。だから、モラト

リアム世代と括られるのです。

そうした、私たちの価値観や考え方が、今新しい時代を切り拓く原動力になるとすれば、多種多様な価値観や考え方を柔軟に取り入れ、そこからもう一段高い新しい何かを築ける可能性があるということではないかと思えます。それは、上意下達とかピラミッド組織とか、かつての高度成長型の成功モデルとはひと味違うものです。その萌芽は、先ほどから皆さんが話されている行政、ベンチャー、コミュニティ活動などに、すでに見られます。

私たちの世代はバランス感覚がありません。それがモラトリアムと言われる原因でもあるのですが、あまり極端に振れずに多くの人の意見に耳を傾けられるし、受容もできる。世代的にも幅広い人たちの違った意見を取り入れて、何かをつくれる可能性を秘めている。最近、お話をうかがう同世代の経営者やオピニオンリーダー

●1975年(昭和50年)

ベトナム戦争終結

中島みゆきが「時代」でデビュー
少女マンガでは萩尾望都、大島弓子、竹宮恵子らが活躍

●1976年(昭和51年)

ロッキード事件発覚、田中前首相逮捕
荒井由美「あの日に帰りたい」がヒット
平凡出版から「ポパイ」創刊

●1977年(昭和52年)

大卒男子の平均初任給が10万円の大台に
映画「宇宙戦艦ヤマト」大ヒット

●1978年(昭和53年)

新東京国際空港(成田空港)が開港
「UFO」(サウスボー)などでピンクレディーブームが頂点に
キャンディーズが解散コンサート

●1979年(昭和54年)

インヘーダーゲー
ムが大流行
ソニーがウォークマンを発売



●1980年(昭和55年)

山口百恵引退、自伝「若い時」ベストセラーに
元ビートルズのジョン・レノン射殺される
の共通一次学力試験が行われる

●1981年(昭和56年)

英チャールズ皇太子とダイアナ嬢が結婚
「なんとなく、クリスタル」(窓際のトットちゃん)がヒット

●1981年(昭和56年)

山口百恵引退、自伝「若い時」ベストセラーに
元ビートルズのジョン・レノン射殺される
の共通一次学力試験が行われる



なんとなく、クリスタル



田中味夫



山下 正幸(やました まさゆき)

1963年神奈川県鎌倉市生まれ。一橋大学商学部卒業後、日本長期信用銀行に入行。その後、早稲田大学院(MBA)に学び、2000年株式会社ウエルネス・フロンティア・センターを設立。代表に就任。学生時代からラグビー部に所属。現在はトライアスロン大会に出場するなど、いわゆる体育会系。今春より順天堂大学医学部に進学。

●ミドルに至る私の一大事

私には常に持っている大事な写真がある。87年2月、卒業旅行として52日間、中国、ソ連、東欧・西欧の一人旅を決行。手持総額15万円のため、まともなホテル代もなく、時には大道芸を、時には着衣の下着を売りながらつないだ。旧ソ連やアウシュビッツを見て、共產圏の生活や戦争の悲惨さを感じた後、ルーマニアのブカレストからブルガリア経由でトルコのイスタンブールまで3泊4日の格安バスツアーに参加した。

日本人は私一人。確か20米国ドルで食事なし、暖房も椅子クッションもないひどい車中だったが、イラン人、イラク人、シリア人の3人の男性のおかげで快適な旅となった。母国に戻れば生きる保証すらない彼等は、私の優雅で平和な卒業旅行を温かい歌と笑顔で祝ってくれた。深夜、雪の中のイスタンブール、彼らと抱き合って別れたときの寂しさと申しわけなきがら決して忘れない。

今、私はベンチャー社長で超多忙。ただ、どんな状況でも彼らに比べればずっと幸せだと認識している。

の方々からは、かつての大先輩たちとは違う、多様性を享受し、消化できる柔軟なリーダーシップを感じるからです。

自分の夢を持ち、社会と共に生きるという自律

中間 かなり、ミドルの同世代感覚の核心に近づいたように思います。そこで再び今回の座談会の主旨を確認します。それは、ミドル世代の特徴を確認した上で、その特徴を、現在そして近未来社会に対して、どのように活かしていくかということ。そのための一つのキーワードがあります。「自律」という概念です。ビジネスマンの自律をテーマにした本は、いつでも書店で平積みされるほど流行っています。概ね「流されることなく自分のライフデザインを明確に持ち、自らのキャリアデザインに基づき、核となる自分のコンピテンスを

持つて、会社や他者に依存するのではなく、自律した働き方、生き方をしている」という主張です。しかし、すべての人々が、こんな自己完結で利己的な生き方、働き方に猛進するのは、豊かな社会への道筋として真に望ましいことなのでしょうか。そこで、今度は皆さんにとっての「自律」についてうかがいたいと思います。

佐藤 私は、「社会の構成員としての自覚をいかに持つてもらおうか」こそ、子どもたちの教育にとつて最も大事なことでと思っています。そして、これが大人になってからの「自律」につながるのではないのでしょうか。そのためには、子どもたちが小さいうちから実社会とかがわっていかないといいけないと思います。

今、学校では総合的な学習の時間や、地域の人材や資源を活かしたさまざまな取り組みを始めています。これまで、どちらかというと知識詰め込み型だった学校教育

育を大胆に変え、自分で課題を見つけ、自分で学び、考えたことを発表して他者に伝え、意見の違いがあれば協調の可能性を考え合う場にしていくというわけです。このことを、私たちは「生きる力」と言っているのですが、これこそ自律的な生き方と言えるかもしれません。

一方、大人の学びは、これまで学んだことを、社会にいかに戻元していくかを考えることが大切だと思います。地域活動の中で発揮するもよし、子どもに伝えるもよし、さまざまな活動を通して、自分が身に付けてきたものを再び社会に戻元する仕組みをつくるのが大事。「まわす」ことによつて、学びの文化が発展していくと思うのです。

中間 循環は経済だけでなく、学びも同様ということですね。自らの学びを地域や社会に循環させていく。それによつて、自律した生き方が出来ていく。竹内さんは、

んがベストセラーに

●1982年(昭和57年)

東北新幹線、上越新幹線開業

西武百貨店のCM「おいしい生活」が話題に

フジテレビのバラエティ「おれたちひょうきん族」が大人気

●1983年(昭和58年)

東京ティズニランド開園

NHK連続ドラマ「おし

ん」が社会現象に

●1984年

(昭和59年)

グリコ・森永事件

「オールナイトフジ」で

女子大生ブーム

●1985年(昭和60年)

日航機が群馬県山中に墜落、死者520人

●1986年(昭和61年)

男女雇用機会均等法が施行される

土井たか子が初の女性党首に就任

「スーパーマリオ」のヒットでファミコンブーム

●1987年(昭和62年)

俄万智「サラタ記念日」がベストセラーに

82年に発売されたNECのPC98シリーズが

100万台を突破

●1988年(昭和63年)

リクルート事件発覚

マガジンハウス「Hana」創刊

東証平均株価が3万円を突破。地価高騰続く

●1989年(平成元年)

昭和天皇崩御、平成が始まる

●1990年(平成2年)

ベルリンの壁崩壊



連続幼女誘拐殺人事件で「オタク族」が問題化

すでにそれを実践されています。子育てが一段落した主婦ミドルが、自律した生き方を求めていくケースは増える可能性があらりますね。

竹内 自分の中で「これがしたい」という夢を持つことが、自律の始まりではないかと感じます。子どものときは、みんな夢を持っていたと思うんです。再び夢を持って実現するために現実とのバランスをとっていく。そういう生き方をみんなでしようということ、家庭の中で鬱々としてる女性に「こうすればできるよ」と伝えていけたらと思っています。夢があり、みんなと共に進む自律を望めるはずですよ。

責任ある世代として動きを起こそう

中間 李さんは、成長社会のまっただ中で新たなビジネスを展開しているミドルとし

て、日本のミドルに注文や期待はありますか。
李 日本は今、成熟なのか、停滞なのか、わかりませんが、やっぱり若者に魅力のある社会とか、活力ある社会になってほしいと思う。私たちミドル世代も、もつと自分たちがよりよい社会を築いていくのだという強い気持ちが必要でしょう。

中国から帰るたびに感じるのは、変化のスピードです。以前は中国は遅くて、日本は速かったが、今は逆。来日のたびに、社会の変化のなさにがっかりします。日本は今、重大な選択の時にあると思います。国のあり方も社会も危機的状況に直面し、それを克服しなければなりません。しかし、果たしてみんなはそれに気づいているのか心配です。これでは、日本は沈んでもしょうがないかなと思っています。
山下 まったく同感です。われわれの世代は結局、何ができるのかということですよ。大阪の教育大付属池田小学校で子ども

たちが刺されて亡くなったとき、その犠牲者の中に、歌手になりたいと言っていた8歳の女の子がいました。そのニュースに、歌手の宇多田ヒカルがいち早く反応して行動を起こしたのです。私は彼女こそ、ミドル世代が見習うべき価値観の持ち主だと思いました。今、情報は氾濫しています。大切なのは、情報に共鳴して、素早く行動を起こせるかどうかです。それこそ自律的な生き方です。それを実現できるのが、われわれの世代なのかも知れない。体力も経験もあるし、上を動かす可能性も、若い人たちを引っぱっていける可能性もある。そういう意味で責任ある世代だと思っています。
われわれは一番悪い時代のカードを引いてしまったのかもしれない。だけど、自分たちの行動によって、新しく変わる可能性も持っている。問われるのは、その責任を担うだけの心構えが果たして自分たちにあるのかということです。結局、私にとって



李 秀一 (Lee Xiuyi)

1963年生まれ。87年北京大学法学部卒。96年早稲田大学大学院国際法博士課程満期退学。同年よりアマミューズ国際部に所属し、マネジメント、映画やドラマ、CMの企画・宣伝を手がける。2001年にエンタテインメント企画制作会社である、北京端輝雲皇文化发展有限公司を設立し、日本、韓国、中国を中心とした国際的な企画制作集団を目指す。
(活動内容はwww.ruient.com)

●ミドルに至る私の一大事

「老板(社長の意味)、ファックス」と事務所の若手女性スタッフから今回の座談会の知らせを受け取り、タイトルを見た「…ミドル世代」。えー、ミドルって中年のこと? それって私と何の関係があるの? と戸惑う。もしかして? 彼女に思わず「私はもう中年ですか?」と聞いてしまふ。はははと笑いながら、相手からの「はい、老板!」という響きに、ファックスの内容を確認するよりも、ショック、複雑な思い、感無量…。さまざまな感情がその一言から洪水となってあふれ出した。

そういえば、ここ1、2年、活動拠点を中国に移して以来、中国語を多用するにつれ、「老」という言葉と結びつけられる機会が非常に増えた。あつたためて思い出す。老板のほか、老師(先生や相手に尊敬するような呼び方)、老大(ボス)、老手・老妻(ベテラン)…。相手に尊敬されるポジションに至つた。中国ではどうしても「ろう」という神経質になりやすい言葉が先につく。

つまりもう「チウウネンオヤジ」なの? この言葉は自分と関係あると一度も思ったことがない私は、この「ミドル」という文字に、もはや崩壊寸前…。

●1990年(平成2年)

ゴルバチョフ、ソ連の初代大統領に就任
一・五七ショック、出生率が史上最低に

●1991年(平成3年)

湾岸戦争勃発

●1992年(平成4年)

ブラジルで初の地球環境サミット
テレビドラマ「あなただけが好きだった」で冬

彦さんが社会現象に

●1993年(平成5年)

サッカーリーグ開幕

皇太子と小和田雅子さんのご成婚

●1994年(平成6年)

松本サリン事件発生

日本人初の女性宇宙飛行士・向井千秋さん宇宙に飛び立つ

●1995年(平成7年)

阪神淡路大震災

地下鉄サリン事件発生

●1996年(平成8年)

O・157集団食中毒発生

●1997年(平成9年)

葉書エイズ問題で逮捕者

●1998年(平成10年)

北海道拓殖銀行「山一証券」が経営破綻

●1999年(平成11年)

長野冬季オリンピック開催

●2000年(平成12年)

東海村民間ウラン工場で日本初の臨界事故

●2001年(平成13年)

介護保険制度スタート

●2002年(平成14年)

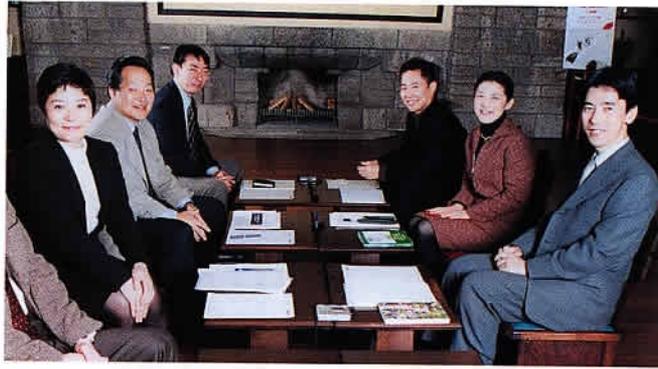
小泉内閣発足

米国同時多発テロ発生

●2002年(平成14年)

アジア初の日韓サッカーWカップ開催





「自律」とは、「サバイブ」です。危機感を忘れずに、サバイブできる力を一人ひとりが持つことです。小さくても動きを起すこと。このあたりに、私たちミドル世代がやるべき仕事、生き方の方向性があると思っています。

小林 イタリアは、基本的に自己責任の国です。極端な例ですが、楽しい食事をして、ワインを一本飲んでから車に乗って帰る。完全な飲酒運転です。ただし事故を起こさなければ、それだけのこと。制限時速130キロの高速道路を、200キロで走る人もいる。しかし、事故を起こしたら、当然のことですが、ものすごい賠償責任がかかってくる。ある意味では、自分が強く生きられれば、それでOKの社会です。それに対し、日本は規制緩和も進まず、自己責任を問われない社会で、すくなく自律しにくい環境にあると感じます。

もう一つ、私の担当している健康機器製品などは、およそ95%を中国で作っています。国内は、わずか5%足らずです。中国で作ったものを、直接海外で売るといふことは、外貨を稼げません。日本は、農産物の自給率もすくなく低い。ヨーロッパの国々では、ほぼ100%自給できていますので、外貨を稼がずとも生きていけます。しかし、日本はそうじゃないのに、頼みの綱の外貨を、工業製品で稼げなくなっている。

これで日本は自律社会になり得るのかと心配になります。

大型バスでは自律社会にたどりつけない

阿部 私は、女性については、あまり心配がないと思っています。女性は、これまでさまざまなライフステージのポイントで、選択をしてきたわけです。結婚するしない、子どもを産む産まない、同居するしない。そのたびに、自分自身と向き合って、自分なりに大きな人生の選択をしてきています。ところが男性、とくにサラリーマンはそうではない。

昔、堀紘一さんがサラリーマンを例えて、「バスに乗るようなもの。バスの中から、みんな同じ方向を向いて外の世界を見ている。終点ですよ、と言われて定年でバスを降りると、ようやくそこで社会をリアルに見れるようになる」とおっしゃったことを思い出します。私たちはこれまで一つの方向を向いて邁進しがちだった。これからは、自分自身の人生を見つめるためにも、心のよりどころを、一つでなくいくつか持っていたほうがいい。ボランティアでもいいし、趣味や友だちとの交流、勉強でもいい。仕事以外の世界があると、自分のやっていることを相対的に見ることができ

し、豊かな老後にもつながっていきます。この点、男性は大丈夫かと心配します。

私たちの世代は、まだ人生の終着点でもなく、ヒヨコでもないときに90年代の「失われた10年」を経験しました。実は、それがものすごく大きな糧になるのではないかなと思うのです。何の根拠もない楽観論ですが、「これを無駄にしているまいぞ」とまなじりを決してもうひとがんばりしたい、そう思います。

佐藤 少し悔しいのですが、僕は日本で一番大きなバスに乗ってきたわけです。乗客でいるうちは安泰なわけですが、いつかは終点が来る。皆さんのお話を聞いて、自分もまた生き方を見つめ直さなきゃなと刺激になりました。

中間 皆さんにとつての「自律」は、単に自ら立つだけではなさそうです。「律」という部分を、どのように読み解いていくか、今後の私たちHRの課題となりそうです。社会の中で豊かな関係性を持ち、自分という資源を社会の中で循環させる回路を開いたり、他者からの恵みを受けるために動く。それが、個を社会の中で活かし、欲びも感じられる生き方ですね。ミドル世代の持ち味は、素直に動き始めてみることから、生き生きと発揮されそうに思いました。本日はどうもありがとうございます。